

特集●西成特区、釜ヶ崎、未来へのまちづくり

いまの釜ヶ崎をみるには

—二二〇年のスパンで

ありむら潜 6

西成特区構想にかかわる議論経過

—まちづくりビジョン有識者提言にいたるまで—

白波瀬達也 18

インナーシテイはジェントリファイ

ケーシヨンにどう向き合うか

水内俊雄 30

西成区で「生活支援」を続けることの意味と課題

尾松郷子 46

まちのポテンシャルと観光の二つの力

—新今宮界限と西成特区構想の今後にむけて—

松村嘉久 56

図書紹介

釜ヶ崎の歴史を知る図書とデジタルアーカイブ 谷合佳代子 66

佐藤一子著

『学びの公共空間』としての公民館 (岩波書店)

加藤英一 74

—九条俳句訴訟が問いかけるもの—

連載 なにわ路上観察日記

第57回 大阪府八尾市界限

木綿と音頭と子どもに教えられ 前田和男 76

おおさかミュージアム雑観 35

文房具四宝八宝 加藤英一 80

新・韓国通信 韓国風土記 (7)

改革の象徴 金徳煥 84

「守る」だけでは勝てない時代

—「維新政治」からみえるもの—

松本 創 88

第四期市民自治講座 自治体とは何か、公務員とは何か(第二回)

自治体のいま

—分権改革後の国—自治体関係から—

今井 照 98

いまの釜ヶ崎をみるには 一一一〇年のスパンで

ありむら潜

釜ヶ崎のまち再生フォーラム事務局長
漫画家

はじめに

本稿での私の役割は、西成区・あいりん地域（旧釜ヶ崎一帯）の過去・現在・未来について今日的な俯瞰をすること。その場合、研究者でもない私なりに、現在大きく進行中の地域住民・行政の協働による内発的なまちづくりになるべく絡ませながら語ることをだと考える。このまちづくりにはその源流からかわつてきた立場なので。

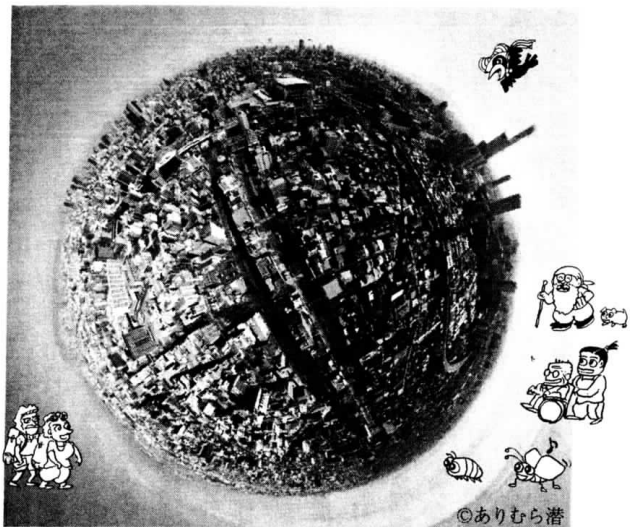
写真をご覧いただきたい。球体の右端に写るのがあべのハルカス、真ん中付近に縦に走っている道路が堺筋、および阪堺線（路面電車）の軌道で、それと交差するかたちで

上部にJR新今宮駅の長いプラットホーム。（判別しにくい）が）球体の左端に旧・あいりん総合センター、およびすでに移転がなつた市営住宅（旧第一住宅）などが白っぽく写っている。つまり、本号の特集テーマであるあいりん地域（旧釜ヶ崎一帯）をふくむ新今宮駅周辺地域を一体的に「鳥の目」で俯瞰することができる。じつはこれはドローンでの撮影写真を球体に画像処理したものだ。そのココロは、①この地域が、激しくグローバル化していること（インバウンド・ラッシュや国内外からの不動産資本の進出）、②半世紀にわたる地域内対立と分断の負の歴史を克服して、不器用ながらも内発型・ボトムアップ型で住民が一生

懸命取り組んでいるまちづくりが、こうした荒波に負けず、丸く一つにまとまっていくようにとの切実な願い、この二つを込めている。

私は現在、まちづくりの取り組みのなかで地域住民で設立した萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社で「萩まちだ

いまの釜ヶ崎をみるには120年のスパンで



このホットな一帯。ウォームな心でクールにみる。鳥の目、虫の目、生活者の目、社会起業家の目、駅利用者の目、外国人旅行者の目、行政の目……。たくさん集まるほどまちづくりは豊かになる。

より」という、この境界のタウン紙の発行と編集をしているのだが、この写真はその過程で撮つたものだ。まちづくりでは地域を面として「鳥の目」から俯瞰するだけでなく、そこに暮らす個々の生活者の目線、つまり「虫の目」でみることがあわせて不可欠だ。一九九〇年代後半にはじまるホームレス支援のまちづくり実践のなかでずいぶん痛感してきた。このイラストが本稿の視点のようなものである。

なお、「萩まちだより」は水内俊雄・大阪市立大学都市研究プラザ教授（本誌特集にも寄稿）、ならびに吉村智博・同特別研究員（西成情報アーカイブ学芸員）のお二人の協力を得て、当地域の歴史、誤解、潜在的可能性を掘り起しているところだ。そのお二人から学んだことも多々あり、本稿にも反映していることを、感謝をふくめあらかじめお断りしておきたい。

一一一〇年スパンと六〇年スパンでの見え方の違い

(1) そもそもこの地域は、单身男性日雇い労働者に特化した地域という意味での典型的な釜ヶ崎イメージに引きずられすぎである。それも、一九七〇〜八〇年代の全盛期の釜ヶ崎イメージである。

ご存知のように、六〇年代に日雇い労働者が極度に集住

するまちとなり、「釜ヶ崎」と「あいりん地域」という呼び名が社会に浸透してきた。両者ともじつは地名ではない。後者は行政施策名だし、前者も地名ではなく、不安定雇用と無縁状態という二つの貧困が個人にワンセットで具備され、この土地に特有のかたちで濃密に集積している「状態」を指す言葉だ。「状態」だから、日本列島総釜ヶ崎化という言葉があるように、拡がっていくのだ。釜ヶ崎歴四四年の私はそう考えるようになっていた。一方、社会運動系の人びとはここを資本や政治の不条理を撃つ運動の聖地として扱ってきた。それらの結果、(JRおよび南海)新今宮駅周辺は丸ごと釜ヶ崎(≠あいりん地域)という単純化されたイメージが固定化してしまっている。建設日雇い労働問題の視点だけが偏重されてきた。その見方を私はここでは六〇年スパンと呼ぼう。六〇年代からそうなってきたからだ。

いまやこれは硬直化し、風化している。経済社会構造の大きな変動のなかで生活者目線で乗り切っていくには弊害が大きくなっていると感じる。釜ヶ崎とはあまりにも強烈な体験であったし、それが弱まりつつもまだ現在進行形でもあるので、その変容を冷静な目でみるのができないでいる「空気」がある。二次情報に頼る一般市民の釜ヶ崎シンパ層やマスコミ関係者、ときには支援団体のなかに

賃宿が現・簡易宿所街のある場所に移ってきた(旅籠と合流)。それを追いかけるように、宿代を払える職工層が移ってきて木賃宿が徐々に増えていき、こんにちの西成区の簡易宿所街のはじまりとなった。やがて都市化の進展とともに急激に数を増し、一九一〇年代半ばには五〇軒前後、一万数千人規模の木賃宿街になった。

これが、おおよそその形成史である。私が釜ヶ崎へやって来た一九七五年頃は、長町スラムから(一九〇三年にいまの天王寺公園や新世界一帯で開催された第五回内国勧業博覧会を機に)「丸ごと強制移転」させられたという説が通説であったが、その後二〇〇〇年代になって研究が進み、いまのべたような見方になっている。

こうして、いまの釜ヶ崎をふくむ新今宮駅界隈は宿の集積がまちを形成し、変容させ、逆に社会変動によるまちの変容が宿の業態を変えていくという、宿とまちの相互変容のなかで動いていく、わが国でも稀有な地域であり続けている。たとえば最近なら、バブル経済崩壊後に野宿生活者が続出するようになると、彼らが生活保護で暮らすアパートに業態転換する流れも二〇〇〇年代にはあり(六〇〜七〇軒)、いまはゲスト

すら、その硬直があるように思えてならない。

(2) 一二〇年スパンでの把握でこそ全体像がみえる。じつはこの地域が「宿が集中するまち」として形成された歴史は一二〇年間あり、いわゆる釜ヶ崎(明治期に近隣に小字釜ヶ崎という地名が存在したが、本稿では無関係)の歴史はそのなかの半分、つまり六〇年でしかない。ゆえに、以下のようなさまざまな点で、この地域一帯は六〇年スパンでみるより一二〇年スパンのほうが大きなパノラマが開かれ、頭は柔軟になる。

① 二〇一〇年代のインバウンド・ラッシュはこの地域の特質に基づく自然な出来事であるとして受け入れられる。

当該場所は江戸時代には徳川御三家の一つに通じる紀州街道沿いに形成され、田園風景のなかにもともと旅籠が数軒あったことが確認されている。そこへ、① 一八九八(明治三一)年に「宿屋営業取締規則」という木賃宿などに関する法令が制定されて、木賃宿の営業は大阪市外(当時は現在のJR環状線以南が大阪市外)で行うべきこととされた。② 同じ頃、日本橋界隈で道路の拡幅工事等があった影響で長町スラムの住民もいったん四方八方に散らばった。そのなかで数軒の木

ハウス化や民泊化、売却されて一般ホテル化の流れもある。ということは、こんにちの海外観光客(インバウンド)が安宿を求めて殺到する大波は、これに根差した当然の事象であるといえる。ただ、その量は半端ではないが。

② 六〇年代に単身男性日雇い労働者だけの極度な集住地域となった、つまり「釜ヶ崎」になったという大きな転換も木賃宿や簡易宿所といった「宿のあるまち」であったがゆえに、その発展形態として可能となったといえる。ということは、また宿を使った別の景観に変容していく可能性もある。

ちなみに、それまで住んでいた家族世帯は周辺区の公営住宅に移っていった。国・府・市の行政が直接的・間接的にそのような人口構成のまちへと政策誘導していったからだ。「狭い部屋でもいいので、どんどん簡易宿所をつくってください」と市役所の役人が簡易宿所経営者に語った逸話なども残っている。

③ 一二〇年スパンで俯瞰してこそ、東はJR天王寺駅(西は国道二六号線にいたるまでのJR環状線沿い一帯(冒頭の球体写真ではあべのハルカスのある右端から西の端いっぱいまで)の一体的(一帯的)把握が可能となる。六〇年スパンではむしろ釜ヶ崎が存在する

区域を分断・孤立させる発想に閉じ込め、広く大阪・関西ワイドでこの地の役割を位置づけられない。

そもそも江戸時代も、大正時代も、この一帯は海運や鉄道網の集積する大阪の南の玄関口だった。この一帯の一体的把握は、『萩まちだより』でも水内俊雄教授らが提示している（二〇一八―二〇一九年の各号）。当該地域を構成する飛田・今池・山王・太子・萩之茶屋・花園の各区域はそれぞれに異なった特長や役割をもちながら、日本国中から産業やエンターテインメントや労働力を惹きつける「地力と磁力のまち」として一体的にとらえられる、と。だからこそ、当時は日本有数の鉄道網の結節点であり、各種博覧会が何回も開催されてきている。そこにこれからの潜在的可能性もあるという見方だ。

こうとらえると、新今宮駅周辺がいかに交通の要衝であるかをあらためて感じさせる。ましてやこんにちのような地球規模での大観光時代になると、六〇年スパンではとらえきれない、大きなストロング・ポイントであることがわかる。そして、これをプラスに活かさないまちづくりや地域再建・暮らし再建はあり得ないと思われる（↓後述の「有識者提言」につながる）。

⑥ 六〇年スパンでみると、どうしても日雇い労働者層

しか視野に入らない。町会長（計一〇町会あり、町会入会の住民は全人口のわずか六％程度）たちの悲痛な叫びなどは一部の支援団体からは敵視され、マスメディアからは無視される構図になる。二〇年スパンなら、女性や子どももふくめて地域内に存在する多様な住民層・職業層が視野に入るので、そうした人びととの共生や連携の視点、つまりまちづくりの視点が入ってきやすい。この違いは実践面ではとても大きな分かれ道となっている。

⑦ 二〇一八年一〇月に大阪市長宛で八〇ページにのぼる『西成特区構想まちづくりビジョン 有識者提言書』が提出されたが、そこでは当該地域のストロング・ポ

④ そもそも毎朝、あるいは労働需要の細かい変動に応じて機動的に、日雇い労働力を各地へ「配送」する基地（釜ヶ崎）が当該地域内の西側に成立したのも、前述したように、交通の要衝であることも関係していることは昔からいわれている。JR、南海、阪堺、地下鉄（御堂筋・堺筋）の各駅が集まり、求人車が走る阪神高速道路の出入り口にもきわめて近い。関西圏を中心とする建設業の雇い主にとってはこれほど便利な場所はないのだ。

⑤ 行政責任は二〇年スパンからこそ追及できる。行政が経済の論理優先で単身男性のまちに誘導していき、持続可能なまちづくりをしたことは政策的に大きな誤りであったし、その行政責任を問うことは歴史の忘れ物として残っていると私はずっと思っている。以来、町会系・簡易宿所経営者系・運動団体系など地域内の住民間対立と不信も半世紀続くことになり。懸命の努力で二〇一四年に地域ぐるみの「あいりん地域まちづくり（検討）会議」が成立するのだが（後述）、よくぞここまでこぎつけたものだと思っしている。しかし、いまだに続く困難の根底にはこの歴史の忘れ物が横たわっていると、私はいつも嘆息する。もちろん、行政が意図的に誘導したこのようなまち

⑧ この地域は形成時から二〇年間、宿を基盤にしたいわば都市型の「中間居住のまち」であり続けたわけだ、今後のまち全体のビジョンづくりでもやはり「中間居住のまち」であることをストロング・ポイントと位置づけ、活かすことが歴史にも実態にも合う提案である。『提言』にもそれは反映されている。

二〇〇八年に連合町会の呼びかけで労働者支援団体その他が自主的に集まってスタートした（仮称）萩之茶屋地域まちづくり拡大会議が「子どもの声が聞こえるまちづくり」を共通のスローガンの一つにしてき

た。家族むけ住宅の問題もふくめて、今後プロセスをどう設計していくか大きな課題だが、すぐには現実的にはなりにくい。現代都市文明のなかでは住まい方はますます多様化している。一〇年スパンで考えるまでもなく、定住と滞在の中間に暫居・暫住とも呼ぶべき、居住のグラデーショナルの実態がこの地には進行しているようである。

⑨ だからといって、「釜ヶ崎の六〇年」をなおざりにしていいはずもない。いやむしろ、苦難の歴史、この地に一時的にでも暮らし、就労したであろう一〇万人は優に超えるはずの日雇い労働者たちへのレクイエム、蓄積された弱者支援の豊かなノウハウ、特有の社会資源・地域資源は継承発展されるべきである。その具体化として、有識者提言では「西成型サービスハブ」として引き継ぐ提案に落ち着いた。私個人も納得しているし、その策定過程にいくらか関与することもできたことは喜びでもある（後述）。そして、これはジェントリフィケーションへの一つの対抗策でもある。

⑩ 釜ヶ崎六〇年は「西成型サービスハブ」へアップグレードを

サービスハブがどういう概念かは、本特集のほかの執筆者との重複をおそれつつ、私なりに書いておこ

う。

一般的にも、あるいは格差社会が拡がればなおさら、一般施策では対応が困難な、社会福祉制度の谷間の人びとが存在する。下層社会をなす、そういう人びとが社会福祉サービスにアクセスできる場所が必ずいる。巨大都市なら何カ所も必要なのだが、結局住民の猛反対に直面するので、専用サービスが集積する地域としては、早い話、釜ヶ崎みたいな既存地域にいつまでも限定されていく。そのような役割をする地域ではボランティア・セクターが活躍していて、新自由主義的な都市再開発からみずからサービス拠点を守ろうとする。守る方法は国や都市で異なり、自力で土地等購入型、ネットワークで対応型、行政が積極的に介入型、混合型がある。

ここまでは二〇一八年の「第二十四回まちづくりひろば」に招いたサービスハブ論の研究の国際的第一人者ジェフリー・ドゥヴェルトウイユ氏（英国カーディフ大学上級講師）が語った内容の私なりの理解だ。

この論に私が着目したのはつぎの点だ。①釜ヶ崎のような世間的には忌み嫌われる貧困集中地域が果たしている役割をきちんと承認している（社会福祉サービス拠点）。②困難を抱えたはざまの人びとがどの地

域にも存在することを認め、自業自得論で切り捨てる

立場とは正反対の立場である。③ジェントリフィケーション論を「オオカミが来る！」式にただわめくのではなく、どうしたら抵抗できるかの実践論的立場を追求する。ただ、④（都市計画的視点を入れた）地理学的概念であることから、社会福祉サービスの質（あり方）の問題はそれほど吟味されない。そこで、釜ヶ崎でのまちづくりビジョン議論では、（ハウジング・

仕事・医療・福祉など多様なサービスを絡ませた地域連携拠点（サービスハブ）の構築で、（やり直し、生き直しのできる）再チャレンジ可能なまちづくりを推進する」という提言に落ち着いた。歴史的に集積したサービス供給システム、つまりサービスハブの質を社会再参加型に磨き上げればいいのだ。そうして、釜ヶ崎課題先端地域実践先進地域として、蓄えたノウハウ（ソフト）を一般地域施策にも影響させていく。サポーターハウス等の創設や自立支援費の制度化もその先行事例といえる。これはもう「西成型サービスハブ」への進化である。この提言は「あいりん地域まちづくり会議」（後述）にも提出、報告された。全体を束ねる「落としどころ」になったと私は受けとめている。

二 現在の内発的まちづくりは八年スパンではなく、

二〇年スパンでみないと評価を誤る

いま、世間にこういう誤解があるようだ。「西成が大きく変わったのは二〇一二年に橋下徹市長が打ちだした西成特区構想からだ」と。そして、釜ヶ崎シンパ層などは「大阪都構想と対の動きだから、警戒すべきだ」「支援団体は、あそこまで協力していいのか」「行政や維新に利用されているだけだ」と。これは物事を二〇一二年からの八年スパンでみようとすることからくる誤認だ。重要なので、長くなるが説明しよう。

この内発的なまちづくりの動きは二〇年前からはじまっているのだ。一九九八年がホームレス問題のどん底の時期で地域全体が危機に喘いでいた。九九年にNPO釜ヶ崎支援機構、釜ヶ崎のまち再生フォーラムなどがつぎつぎと生まれてきて、まずは雇用づくりやさまざまな支援活動、そのための連携が模索されはじめた。私たちなどは「ホームレス問題を、たんに脱野宿だけでなく、その後の単身高齢生活の諸課題対応をも視野に入れて、まちづくりという方法で支援しよう」と活動を開始した。簡易宿所転換型のサポーターハウスもその文脈のなかで創設され、野宿生活者を生活保護で吸収していった。明確にまちづくりという

言葉を使っていた。だから九九年がこんにちのまちづくりの源流である。ただ、NPO釜ヶ崎支援機構の関係者は「いや、われわれが釜日労・釜ヶ崎キリスト教協会・市民等で釜ヶ崎反失業連絡会（反失連）を結成したのは九三年。このときにすでにこんにちのような幅広い戦線の構築をめざしたので、われわれ的には九三年（が源流）だ」と語ってくれたことがあったので、それも紹介しておく。

連合町会も野宿者問題を何とかしたい焦燥感からはじまり、ホームレス自立支援法（二〇〇二年）の基本計画へのパブリックコメントへの勉強会などを経て二〇〇三年には「萩之茶屋地域周辺まちづくり研究会」を発足させた。それを母体に労働・福祉・教育子ども・まちづくり関係等々の諸団体が同じテーブルにつく「仮称萩之茶屋地域まちづくり拡大会議」に到達したのがまことに大きかった（二〇〇八年）。この地について地域住民各層横断型の事実上のまちづくり協議会的な陣形が、それも自主的に形成されたからである。これを見て当時の行政が腰を抜かした逸話も残っている。

この「拡大会議」生成前の切実な課題には当時地域内にいた二〇〇頭もの野犬対策もあった。ヒトを咬む事案が頻発していたからだ。そこには思想的な右も左もなく、等しく咬まれていた。「思想を超えて」集まるしかなかった。

ちづくりは、どの市長が登場しようが、地域の住民が堂々とみずからの自治能力を高めていくだけのことである。ただ、それまではまちづくりに無関心だった一部の支援団体や個人は八年スパンでしかとらえきれず、ギャップはなかなか埋めきれない。しかし、「あいりん地域まちづくり会議」をはじめとする話し合いの仕組みをつくり、あきれるほどに粘り強く、丁寧に議論を重ね、しかも絶対反対派もメンバーに入れながら、進めていくすがたがこの二〇〇年あっただろうか。「ボトムアップ型なのはよくわかった。でも深さがまだ足りない」というならまったく正当な批判だ。私たちこそ、どうしたら深まるか、あるいはヨコ方向にも、局地性を超えて全大阪ワイドの広がりをもった議論ができるか、問題意識を強くもっているところだ。そうした方々には逆に協力をお願いしたい。ただ、全国にこのようなまことに面倒くさいことを愚直に重ねている地域があるだろうか。八年スパンだけでみることはこのような「民主主義の学校」新今宮分校の評価を大きく見誤ることにつながる。

「そやから、ほんまの殊勲者は野犬や」と私たちはいまでもよく笑う。大阪市長は関市長↓平松市長の頃だった。萩之茶屋小学校東側の塀沿いにあった数十軒の違法屋台群（覚醒剤を売っている屋台も発覚）の平和的解決問題や野犬対策には平松市長が現地視察にきた。当該区域の町会長は直接の話し合いも行った。詳細を語るとキリがないのでもうやめるが、こうして二〇一二年一月に橋下市長による西成特区構想が打ちだされるまでにはたくさんの取り組みがあったのだ。橋下市長の側にはアドバルーンだけで政策的な中身はまだ何もなかった。前述の「仮称萩之茶屋地域まちづくり拡大会議」や「再生フォーラム」主催の「定例まちづくりひろば」では、はじめは西成特区構想に警戒や無視や反対などの意見もかなりあったが、この枠組みは一〇〇年に一度のチャンスとして活用すべきという方向で多くが一致して、九分野三〇〇項目の提案をしていった。これによって思いもよらぬボトムアップ型の陣形ができあがった。これが真相である。

以後、「拡大会議」が下支えになって、公的な諸会議体が開設されていった。その二〇一二年からの約八年間だけをみてあたかも維新の会だけが状況を動かし、地域はそれに追従、あるいは利用されているような見方、警戒感が思った以上にあることに私は驚くことがある。もともとま

三 これからのまちづくりについて。

「黒船」とどう向き合うか

もう一つの「二〇〇年なかったこと」がはじまろうとしている。前述したような地域住民による懸命のまちづくり努力などあざ笑うかのように、市場原理に乗った本物のグローバル資本主義が進出してきている。当該地域の一部である飛田本通り商店街沿いには「大阪中華街構想」を中国・福建省出身の新華僑グループが推進中。ほかにシンガポールなどいくつかの国際不動産投資ファンドが土地や簡易宿所を買収中だし（インバウンドむけの本格的ホテルに新築や転換）、JR新今宮駅北側隣接区域には星野リゾートが大型都市観光ホテルをすでに建設中である。海外の投資家から見れば、いまや（日本や関西自体がそうだが）新今宮駅界隈は投資関連指標からみても確実においしい場所である。

わが再生フォーラムでは二〇一九年四月に「第二一七回まちづくりひろば」を開催し、この分野の専門家を東京から招いて公開学習会と意見交換をやった。他国の例でも、何らかの政策手段で政治や行政の介入が必要であることもあらためてわかった。その動きがまったく鈍いことも課題だ。地元住民はまずは地域が一つにまとまって「黒船」

『市政研究』 関連号

第164 (夏季) 号 2009年7月

特集●釜ヶ崎の現在

あいりん日雇労働市場をめぐる諸問題	玉井	金五
大阪ホームレス就業支援センターにおける就労支援の現状と課題	田中	滋晃
就労支援における課題と釜ヶ崎支援機構の役割	沖野	充彦
貧困地域の健康問題	田淵	貴大
就労困難な人びとへの生活相談・支援活動の現状と課題	尾松	郷子
釜ヶ崎—更生相談所の現場から—	中島	啓治

第124 (夏季) 号 1999年7月

特集●都市とホームレス政策

現代都市と「ホームレス問題」	岩田	正美
「野宿」の取材ノートから	原	昌平
ホームレスと雇用政策	福原	宏幸
地域に根ざし、地域でささえてこそ、居住は安定する	ありむら	潜
「野宿者問題」	中山	徹
フランスの「反排除法」にみる「ホームレス」対策	都留	民子
野宿生活者問題とNPO	松繁	逸夫

第103 (春季) 号 1994年4月

特集●釜ヶ崎労働者の現在

「釜ヶ崎労働者の現在」を考える	福原	宏幸
就労状況からみた釜ヶ崎労働者の現在	島	和博
釜ヶ崎労働者と自治体行政	平野	佐敏
「暴動」から見た寄せ場の文化	平川	茂
「先進」と「後発」の遭遇	青木	秀男

に向き合う態勢を一刻も早く作る必要がある。そして、
当事者どうしの「顔の見える関係」をつくりつつ、どう折
り合いをつけていくか。願わくば、グローバル資本のしな
やかな活用にまで持ち込むか。ジェントリフィケーション
もどう克服していくか。たいへんに難しい局面にさしか
かっている。
「想えば、長くこのまちにかかわってきたものだ」。冒頭
の球体写真を眺めながら、つぶやく私である。

(参考文献)

- 吉村智博 『かくれスポット大阪』 解放出版社、二〇一三
年。
- 水内俊雄ほか編 『グローバル都市大阪の分極化の新たな
位相』 大阪市立大学都市研究プラザ、二〇一九年。